ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

News letter

NO.15 MARCH 2007

神領10号墳発掘調査　－大隅のフィールド調査－

2006年8月下旬から9月上旬にかけて、総合研究博物館では鹿児島県大隅地域の曽於郡大崎町神領10号墳で発掘調査を行いました。大隅の志布志湾岸・肝属平野地域は前方後円墳が築造された南限の地域です。ここでは大型の前方後円墳を含む多数の古墳時代の墓が存在しており、日本列島における古代国家の形成や領域を考える上で重要なフィールドです。

神領10号墳の所在する神領古墳群は大型前方後円墳である横瀬古墳に近在し、前方後円墳4基を含む古墳群でありながら、これまでその実態がほとんど不明であったことから、その解明を目指して調査を開始しました。そして、上の写真のような冑をかぶった武人埴輪が出土して注目されています。

1　大隅地域の古墳

古墳を考えること

およそ1500年ほど前の西暦400年代、私たちが今日、前方後円墳と呼んでいる巨大な墓が有力者のために日本列島の広い範囲で造られていました。そのもっとも大きなものは大阪府堺市の大山古墳、仁徳天皇陵古墳とも呼ばれるものです。

同じ時代には鹿児島県でも大型の前方後円墳が造られました。大隅の志布志(しぶし)湾岸・肝属(きもつき)平野の地域です。そしてこの地域が前方後円墳が造られた最南端の地域です。

この大隅地域には大型の前方後円墳や円墳などとともに、地下式横穴墓という墓が5世紀頃を中心に盛んに造られます。地下式横穴墓とは地面から竪穴を掘り、さらに竪穴の下方から横方向に埋葬空間の横穴(玄室)を掘り抜くこの地域の独自の埋葬形態です。

おおよそ3世紀半ばから6世紀末までの古墳時代は前方後円墳を中心に古墳を造ることで有力者たちの身分や勢力などの社会的関係を表した時代だと考えられています。また前方後円墳を中心とする古墳は鹿児島から岩手まで分布し、全国的な社会的結びつき・秩序が形成される過程を表すものだと考えられています。

そのため、古墳は日本列島の広範な地域に社会的共通圏ができあがる古代国家の出現過程を考える上で重要な資料だと考えられています。とくに、大隅の古墳はその分布の南限域であることから、各地域の側には古墳を造ることにどのような意義があったのかを考える重要なフィールドだといえます。

横瀬古墳

横瀬古墳

神領古墳群の近くに横瀬(よこせ)古墳という前方後円墳があります。5世紀前半(TK216型式段階)に位置づけられ、全長140mを測り、周囲に大きな溝をめぐらせる典型的な大型古墳で、遠くからも見通すことができます。この規模は九州でも5番目の大きさを誇っています。

また、この古墳はその墳丘表面を埴輪で飾っていたことが確認されています。この埴輪は作り方の特徴から、地元の土器製作者が作ったものと見られますが、登り窯で焼いています。このことは、この古墳の埴輪を作るために、当時最新の窯業技術を習得した土器製作者がおり、近くに窯を造り、地元の

大隅地域の主要古墳群

下堀遺跡出土土器

人々を指導していたであろうことが考えられます。登り窯は5世紀初頭に朝鮮半島南部の陶質土器の技術から日本列島の須恵器生産に導入され、さらに埴輪生産にも導入されるものです。窯の技術は朝鮮半島から渡来人によって近畿中央部にもたらされ、そこから各地へ拡散する中で横瀬古墳の築造の際にもたらされたと考えられます。

そのほか、横瀬古墳では朝鮮半島系の陶質土器と考えられる土器なども確認されており、この古墳に埋葬された人物が広域交流によって手に入れたものと考えられます。

埋葬施設や副葬品は不明ですが、明治時代に盗掘され、内部が赤く塗られた竪穴式石室から甲(よろい)や剣などが出土したと言われています。

横瀬古墳と志布志湾

下堀遺跡

同じ大崎町域では、下堀(しもほり)地下式横穴墓群が発掘調査で確認されています。ここでは小規模な地下式横穴墓が7基確認されており、鉄剣などが少し出土した他は副葬品はわずかにしか見られませんでした。

一方で、地下式横穴墓群の空閑地に祭祀場があり多数の土器が出土しました。小さな墓域ですが、そこには横瀬古墳と同時期の初期須恵器という稀少な交易品が含まれていました。この地域では、横瀬古墳を中心に5世紀前半に非常に活発な地域間交流が行われていたことがうかがえます。

横瀬古墳と神領古墳群

そのほかの古墳群

大崎町より南の肝属平野およびその周辺には数多くの古墳が造営されています。もっとも代表的なのは肝属郡東串良町の唐仁(とうじん)古墳群です。この古墳群にはこの地域最大で全長154mに復元できる九州第3位の規模をもつ大型前方後円墳の唐仁大塚(とうじんおおつか)古墳があり、そのほか前方後円墳、円墳が130基以上も造られています。

また、肝属郡肝付町塚崎古墳群には4世紀にさかのぼるとみられる前方後円墳が5基存在し、それ以外に円墳なども含め、総計40基に上る古墳が存在します。この古墳群は4世紀から5世紀にかけて造営されていると考えられ、また同時に地下式横穴墓も造られています。この古墳群にある塚崎40号墳が最南端の前方後円墳です。

鹿屋市串良町では鹿児島大学総合研究博物館で2002年から2004年度にかけて発掘調査を実施した岡崎古墳群があります。4世紀後半から5世紀後半までの前方後円墳2基と多くの円墳や地下式横穴墓からなります。大崎町より北では、志布志市の飯盛山(いいもりやま)古墳があります。4世紀後半の古墳と考えられ、壺形や器台形の埴輪が出土しています。ダグリ岬という海に突き出した岬の上に海の交通路を見通す場所に築かれています。

まだまだ、たくさんありますがここですべて網羅することはできないので、代表的なものだけを簡単に取り上げました。

2 神領古墳群と調査の目的

神領古墳群

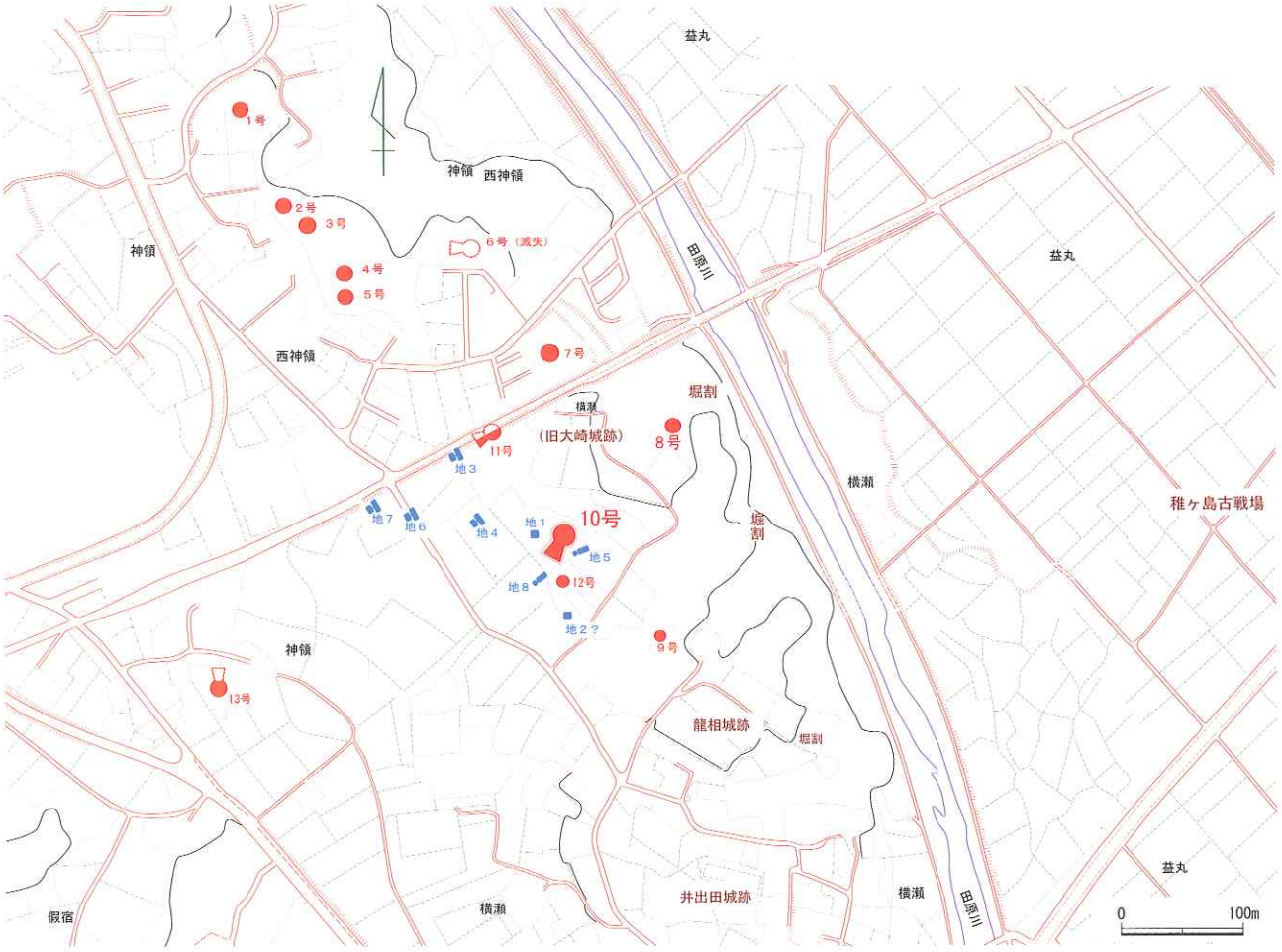
神領古墳群では、これまで前方後円墳が4基、円墳が9基、地下式横穴墓が8基存在するとされてきました。このうち、前方後円墳の6号墳(天子ヶ丘古墳)は昭和43年に発掘調査が行われた後に、破壊されてしまいました。残念ながら調査記録の報告がなされていないので、詳細な状況は不明ですが、埋葬施設は箱式石棺で、石棺の石材と副葬品の銅鏡、鉄刀が町教育委員会に保管されています。鏡は調査以前に採集されていたものです。古墳時代中期前半(5世紀前半)に位置づけられそうです。

地下式横穴墓はいずれも畑作業中に偶然発見されたものばかりですが、なかでも1号地下式横穴墓は、内部に軽石でつくった石棺をもち、また銅鏡や貝製の腕輪も副葬されていました。貝はイモガイという奄美諸島以南にしか生息しないもので、南島域との交流を表すものです。ほか5号地下式横穴墓でも貝製腕輪が出土しています。

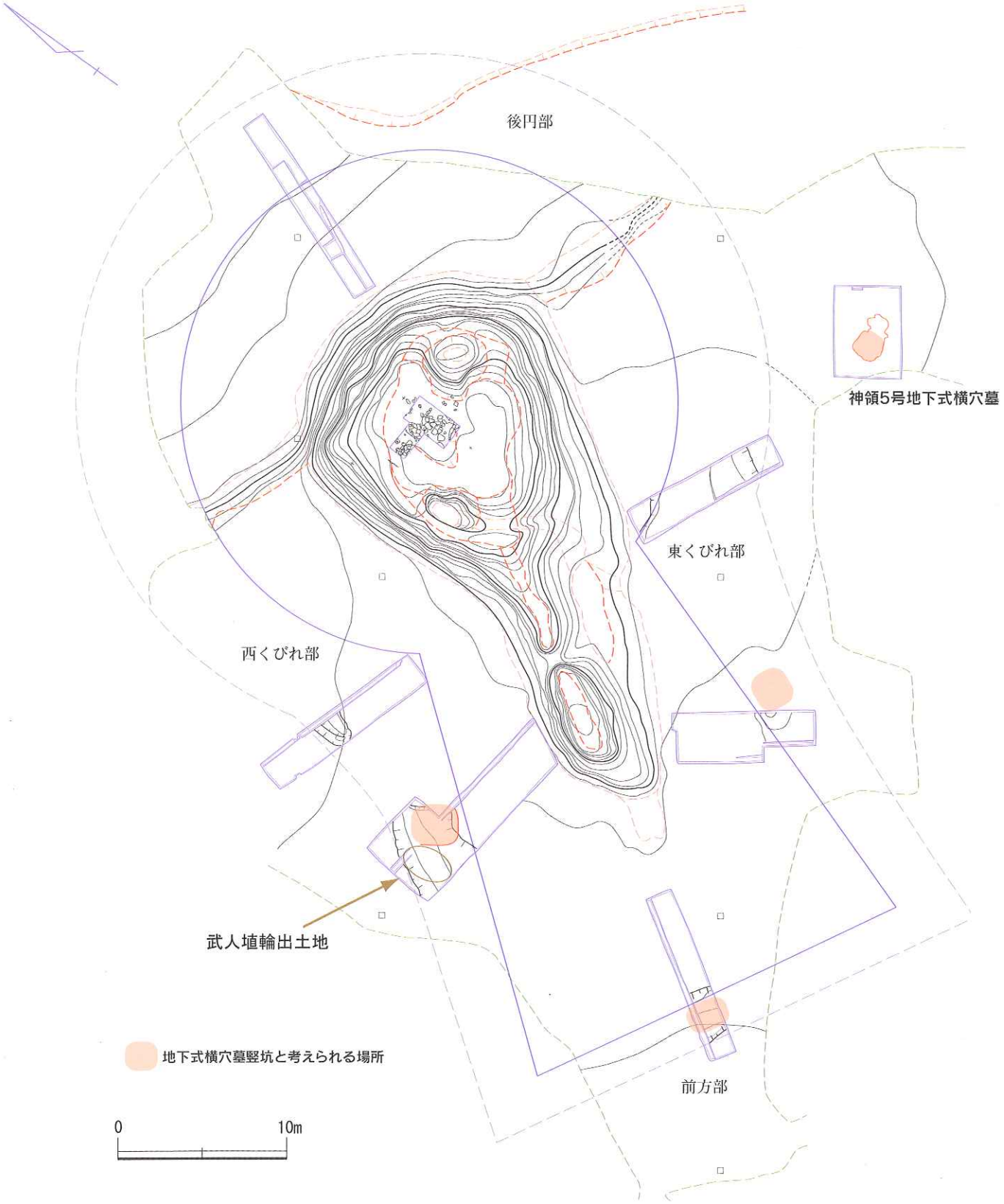
このように、この古墳群に関するいくつかの情報があるのですが、全体としては情報がきわめて少ないといってよく、年代的にも、大隅の古墳としても評価が難しく不明確なままでした。そこで、2006年度、この古墳群での発掘調査を計画しました。

神領10号墳調査の目的

神領10号墳はこれまでまったく研究上の情報がない古墳でした。しかしながら、現状で前方後円墳であり、神領古墳群中ではもっとも大きな古墳であろうことは認識できました。神領古墳群ではこの古墳以外の前方後円墳は消滅したか、半壊以上になっていますので、古墳の規模や形を調査する上ではもっとも多くの情報を得られる可能性があると考えました。そこで、まずは現状の測量と古墳の形と大きさを確認するための調査から始めることとしました。

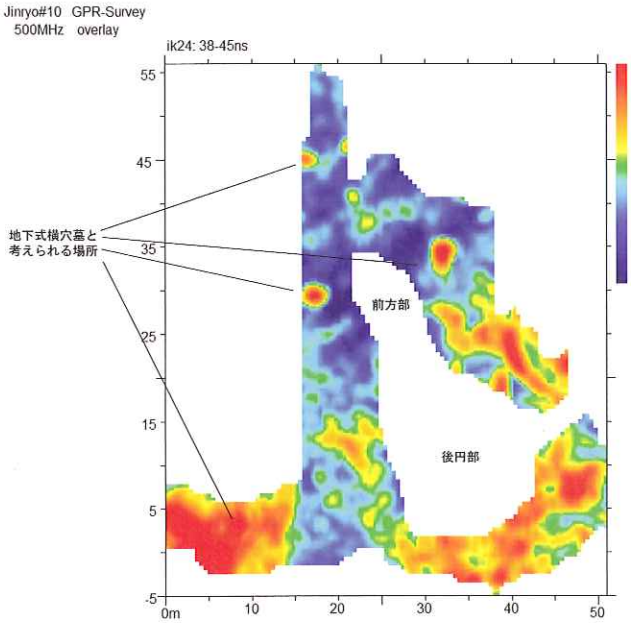


神領古墳群の古墳と地下式横穴墓分布



神領10号墳墳丘測量図

3 発掘調査の成果



地中レーダー探査解析図

前方部西側調査区遺物出土状況

古墳の形と規模

今回の調査では古墳の周囲に7カ所と古墳の頂部に1カ所の調査区を設定しました。この調査によって、古墳の墳丘はずいぶんと削平されているものの、周囲には溝をめぐらせて区画していたことがわかりました。また、周溝の確認によって、この古墳は全長約54mの前方後円墳であることが判明しました。

大隅地域では唐仁大塚古墳、横瀬古墳という2基の大型古墳の他には、墳丘長約80mとされる飯盛山古墳があり、その次は60m前後の古墳が数基あります。後で述べるように神領10号墳は今回の出土遺物から横瀬古墳と同時期の古墳時代中期中葉、5世紀前半に位置づけられます。飯盛山古墳は古墳時代前期末～中期初頭の4世紀後半に位置づけられるため、神領10号墳は5世紀前半では横瀬古墳に次ぐ規模を持ち、その埋葬された人物もこの地域で横瀬古墳に埋葬された人物に次ぐ地位にあったと考えてよいでしょう。

地中レーダー探査と地下式横穴墓

発掘調査に先立って、宮崎県立西都原考古博物館・東憲章氏に地中レーダー探査の実施協力をお願いしました。そこで、この古墳には3基の地下式横穴墓が従属し、周囲にも1基存在する可能性が高いことがわかりました。

その周囲の一基は1987年に発掘調査されている神領5号地下式横穴墓でした。今回あらためてこの地下式横穴墓上部を再発掘し、過去の発掘の際に内部にシラスを充填して埋め戻した5号地下式横穴墓を確認し、神領10号墳との位置関係を測量しました。

調査区の設定に当たっては古墳に伴う地下式横穴墓があると考えられる場所を中心に選んでいます。

その結果、前方部東側の1カ所では、はっきりとした痕跡はつかめませんでしたが、2カ所で地下式横穴墓の竪坑と考えられる場所を確認しました。一つは前方部正面の周溝部、もう一つは前方部西側面です。

出土遺物

今回の調査での大きな成果は、神領10号墳に埴輪が樹立されていたことが判明したことです。ほとんどは小片になったものですが各調査区から出土しました。

前方部西側面の調査区では今回の調査でもっとも多くの遺物が出土しました。ここではまとまった量の埴輪片が出土しています。この文章を書いている現在、まだ整理作業中で接合関係が十分わかっていませんが、おそらくほとんどの破片が接合し、一個体の埴輪が復元できそうです。

埴輪は、眉庇付冑（まびさしつきかぶと）という5世紀前半から後半にかけて用いられた冑を被った人物を表現した武人の埴輪です。出土時は顔面の部分が下を向いており、調査中は器財としての冑形の埴輪だろうと考えていました。ところが、調査最終日に取り上げてみてびっくり、下向きに顔があったのです。この埴輪の特徴やその意味については次章で詳しく述べましょう。

出土遺物

この調査区では祭祀に用いたとみられる土師器（はじき）が出土しています。高杯（たかつき）3個体、小型丸底壺3個体、鉢1個体が出土しています。これはいずれも地下式横穴墓の竪坑上面から出土しており、また竪坑埋土直上に乗っていましたので地下式横穴墓の埋め戻し後の墓上祭祀に伴うものだと考えられます。一方、武人埴輪の破片は土師器よりわずかながら上の地層に含まれ、地下式横穴墓の竪坑のすぐ横に倒れていました。墳丘の裾部近くから倒れ込んだようです。

そのほか、西くびれ部の調査区では初期須恵器片が出土しました。これによりこの古墳が5世紀前半（TK216型式段階）に造られたものと考えられ、横瀬古墳と同時期のものであることが判明しました。ただ、西くびれ部の調査区は十分な調査ができていないので、今後あらためて調査したいと思っています。

墳頂部の調査

後円部にはずいぶん大きく掘り返された跡が2カ所あります。また、後円部の墳頂中央部も、過去に掘り返されていて窪んでおり、調査前の清掃の際に、軽石がごくわずかに頭を見せていました。そのため、この古墳の主を葬った埋葬施設に軽石を用いている可能性があることは理解できました。

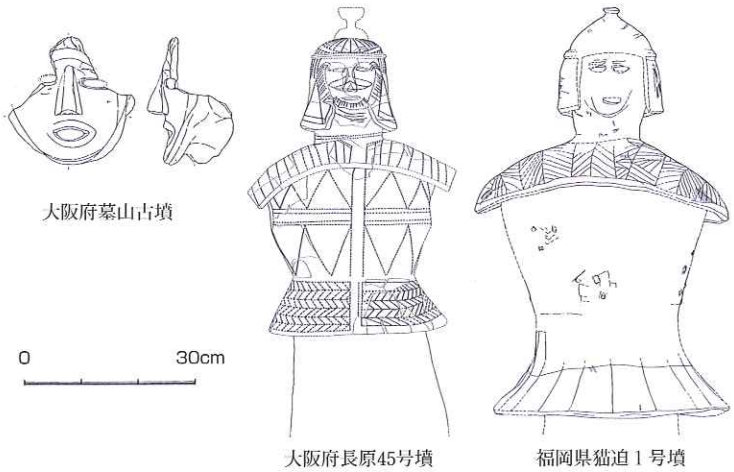
そこで、今回はまず、墳頂部表面の一度乱掘されている土を掘り下げてみました。すると下から次々に軽石が姿を現しました。その中には加工されたとみられるもの確認できました。

今回の調査では状況確認だけにとどめていますので、具体的な構造は未解明ですが、この石材を積み上げて造った竪穴式石室があったのではないかと考えています。ただし、石材が軽いので高さのある石室は造れないだろうと思います。もしくは埋葬施設の上部を覆う石かもしれません。

これらの石材に混じって、埴輪片と鉄製品の破片がわずかに出土しました。鉄製品は小片が5点出土したのみですが甲冑の破片とみられます。おそらく、胴を護る短甲（たんこう）と胸回りを護る頸甲（あかべよろい）の破片だとみられます。ただし、破片が小さいため、十分には検討できていません。

墳頂部

4 埴輪が語るもの



初期の人物埴輪

今回の調査を始めるまで、神領10号墳に埴輪があるとはわかっていませんでした。ましてや武人埴輪が出土するなどまったく予想外のことでした。

この武人埴輪の特徴は、なんと言ってもそのリアルな表情。彫りが深く目鼻立ちがくっきりとしています。鼻の穴までリアルに表現し、口には歯を差し込む溝もあります。群馬県山名原ⅡⅡ遺跡出土の埴輪で白い石を差して歯を表現した例がありますので、これも当初は白い石などを上下に差し込んでいたのでしょう。

一般的に人物埴輪は「埴輪顔」とも称されるくらいに、のっぺりとした平板な顔が特徴といってもよいでしょう。比較は難しいのですが、これほどまでにリアルな表情の埴輪は他にないのではないでしょうか。

この武人埴輪の意義は、実はその表情以上に年代的な位置づけと九州南部という場所が重要です。埴輪は古墳時代前期という３世紀代には出現し、６世紀末まで古墳を飾るものとして作られ続けます。しかし、埴輪といっても、土管のような円筒埴輪や円筒埴輪に壺を乗せた形を表した朝顔形埴輪が中心的な存在で、それに家形や鶏形（にわとり）埴輪などが伴うのが本来の形です。さらに、４世紀後半までには盾や甲冑などの武具や権威の象徴である蓋形（きぬがさ）の埴輪が出現しますが、人物埴輪は５世紀前半になるまで出現しません。

人物を表現した埴輪は埴輪の中でも途中から加わるものなのです。そして、この神領10号墳も５世紀前半です。人物埴輪としてはもっとも古い時期に位置づけられます。

実際には最古の人物埴輪とみられる大阪府墓山古墳、福岡県拝塚古墳出土例よりは、数十年ほど新しく位置づけられますが、全国的にも非常に類例が少ない初期段階の資料です。九州で神領10号墳の人物埴輪より古いか同時代のものは福岡市拝塚古墳、田川市猫迫1号墳と横瀬古墳のもののみです。全国でも、他には大阪府墓山古墳、長原45号墳、百舌鳥梅町窯、百舌鳥高田下遺跡、京都府赤塚古墳、岡山県黒島１号墳などの例しかありません。

また、人物埴輪は関東地方で６世紀代に盛行し、多種多様な埴輪がとてもたくさん作られますが、西日本各地ではわずかずつしか出土していないのです。よく知られている「踊る埴輪」や「武人埴輪」、埴輪をモデルにしたキャラクターなどは、みな群馬や埼玉あたりで作られた６世紀代の埴輪かそれをモデルとしたものです。５世紀前半代の九州南部の人物埴輪というのは年代的にも地理的に非常に稀少で重要な例なのです。

また、神領10号墳の埴輪はその特徴から登り窯で焼かれたものだと考えられます。野焼きという窯を使わない焼き方だと黒斑という黒い焼きムラが表面に残りますが、登り窯ではムラなく堅く焼けます。この窯業技術は５世紀初頭に須恵器の生産技術として朝鮮半島から導入されたものです。大隅地域での窯技術の導入には近畿などの埴輪生産地での技術者の研修などを経て達成されたと考えられます。

この埴輪の製作技法は横瀬古墳の埴輪と同様で在地の土器づくり技法と共通します。埴輪でもっとも一般的な表面調整技法であるハケ技法を使わず、表面を板ナデ技法で仕上げています。薄く仕上げるためのケズリ技法も使っていません。大隅地域で５世紀前半代の埴輪をもつ古墳は、横瀬古墳と神領10号墳しか確認されていませんから、おそらく、横瀬古墳に樹立した埴輪と同じ工房・窯で生産されたものが、神領10号墳にも運ばれたのだと考えられます。古墳の規模や必要な埴輪数などを考えれば、圧倒的な規模を誇る横瀬古墳に葬られた有力者が埴輪生産者を抱えていたものと考えてよいでしょう。一般に窯業を営むためには粘土と燃料になる薪が手に入る場所で、窯を築くためには傾斜地が必要です。おそらく、横瀬古墳と神領古墳群の間の大崎町内で傾斜地を利用して埴輪工房が営まれていたのではないでしょうか。

5　まとめとこれから

神領10号墳の発掘調査はまだ取りかかったばかりです。最終的には、調査が一段落ついた段階で報告書をまとめ正式に情報を公開する必要がありますが、まだまだこの古墳の全体像を解明するにはほど遠い状況です。まずは、墳丘の形状確認を中心とする調査区をまだ何カ所かもうけたいところがありますので、今しばらく継続的な調査をしたいと考えています。それに伴って新たに遺物が出土する可能性も十分あります。これまでに出土している遺物とあわせてより深く、分析を進めてゆく必要があると考えています。

前方部前面より

また、可能であれば埋葬施設の具体的な構造を確かめることや、地下式横穴墓についても調査・分析ができればと考えていますが、いくつもの課題がありますのでそこまでたどり着けるかは今後の進展次第です。

橋本達也

研究の展示

第6回　特別展　「発掘！鹿児島の古墳時代」を終えて

展示の企画

総合研究博物館では2002年度以来、鹿児島県内の古墳の発掘調査を毎年継続的に行っています。これまでに鹿屋市串良町岡崎18号墳・20号墳、南さつま市奥山古墳、曽於郡大崎町神領10号墳と調査を進めてきました。これまでに実施した調査で判明した新たな事実も多く、出土遺物も蓄積されてきました。また、近年は大隅地域を中心として地元の教育委員会などが実施する調査で新たな成果が得られつつあります。そこで、これらの古墳出土遺物を中心として、鹿児島における古墳の発掘調査を紹介する展示の企画を立てました。

第6回特別展は2006年10月17日から11月17日。開館は10時から17時まで、期間中全日開催、入場無料で行いました。

また、展示資料の絵はがきを５種類作成し、一回の来場につき一人一枚プレゼントしました。

「発掘！鹿児島の古墳時代」展示風景

展示資料の概要

展示では以下の3つの構成を取りました。

(1)　総合研究博物館が行った調査の出土遺物を中心に、大隅地域、薩摩南部地域の主要古墳、その他の墓制出土遺物の展示。

(2)　これまでの調査の紹介を目的とした発掘調査作業の道具、整理作業の道具、それらの作業風景の写真、遺構・遺物の実測原図・拓本の展示。

(3)　地中レーダー探査、3次元計測、鉄器保存処理、人骨の形質人類学的分析、赤色顔料の蛍光X線分析、繊維および木質の分析など、発掘調査および整理過程で行った各種分析のポスター展示。

「発掘！鹿児島の古墳時代」展示風景

今回の特別展では、なるべく文化財を身近に感じてもらうために可能な資料は露出展示を行ったこと、一方で自らの博物館資料以外に鹿児島県立歴史資料センター黎明館、鹿児島県立埋蔵文化財センターや県内各市町から文化財を借用していることなどから、会場内は死角を作らずに全体が見渡せるように展示台・パネルを設定しました。しかしながら、展示スペースが十分とはいえないこともあって、3つの構成がそれぞれうまく導線で結ばれていたとは言えないという問題があったように思います。

展示の反応、成果と反省点

展示に先立って8～9月に、今回のニュースレターで紹介した神領10号墳の発掘調査を実施し、9月1日には地元紙を含め、テレビ・新聞各社の鹿児島ニュースとして取り上げられました。また、埴輪が武人埴輪であったことが調査終了間際にわかったため、あらためて10月12日に報道発表しました。このときは全国版でも取り上げられました。展示に先立ってタイミングよく全国版にも掲載されるような新発見があったために、より広く今回の展示が認知される機会を得たと思います。実際、展示が始まってから会場では、「埴輪はどこですか」「埴輪を見にきた」という声が多く聞かれました。

展示が始まってからも、10月19日には地元紙の南日本新聞で紹介され、10月21日には、朝日新聞 鹿児島版 学芸員コーナーに「県内の古墳調査を紹介」として、橋本の執筆した紹介文が掲載されました。

さらに、10月31日「塗り変わる隼人像」として朝日新聞 全国版 文化面に今回の展示をメインとした特集記事が組まれました。これによって、関東・関西圏などからの見学者や問い合わせも来るようになりました。11月3日には南日本新聞 文化面「大崎・神領10号墳　古墳時代史解く大隅」とする橋本の寄稿文が取り上げられ、より今回の特別展の意義を広めることができたと思います。今回の展示では、今までになくマスコミに取り上げられたこともあって、遠方からの来館者が多く、また地元での関心を高めることができたと思います。片道2時間30分もかかる大崎町からは2度もバスツアーが組まれました。

ただし、展示としては武人埴輪という話題の逸品に注目が集中し、これまでに積み上げてきた調査成果が少しかすんでしまったような感もあったことが主催者側としてはやや気になるところではありました。また、新出資料が多いことや展示担当の橋本が直前の夏に発掘調査を行っていたこともあって、準備期間が十分とは言えず展示解説などの冊子を作成するには至らなかった点も反省点として残ります。これは将来的には、あらためて企画を練り直し、今回の展示での成果を反映した鹿児島県の古墳に関するガイド的なものを作成したいと考えています。

橋本達也

鹿児島大学総合研究博物館　News Letter No.15
■発行／2007年3月20日　■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館　〒890-0065　鹿児島市郡元1-21-30
TEL：099-285-8141　FAX：099-285-7267
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/